

地域のニーズに耳を傾け、手助けする 寄り添うことを大切に

安平町社会福祉協議会事務局長 小川誠一さん
安平町社会福祉協議会事務局長補佐 高橋光暢さん

——発災当日の状況を教えてください。

小川 当時の社会福祉協議会は、早来の本所に4名配置、追分の支所に2名配置。発災当日、暗いうちに早来の本所に駆けつけたのは高橋で、すぐに状況確認をしています。私は追分に住んでいるので、追分の支所にまず駆けつけました。



小川 誠一さん

高橋 本所の中は、キャビネットなどが全部倒れた状態でした。停電により照明も点かない状況。靴を履いたまま入り、カメラを持って事務所を出ました。社会福祉協議会では訪問介護の事業も行っているので、古い住宅に住んでいる方や一人暮らし



高橋 光暢さん

の募集と管理をお願いし、地元の状態を把握している私たち社会福祉協議会が住民ニーズ調査を引き受けるなど、役割分担を明確にした体制づくりができました。

——具体的にどう動かれましたか？

高橋 地域の民生委員さん30名にもお願いしてボランティアの依頼票を配布すると同時に、心配な方には直接訪問して困り事の拾い上げを行っていただきました。当初は高齢者で心配な方を中心に回っていましたが、「助けてほしい」と口に出せない方が結構いるのではないかと話が出て、9月14日からの3連休に全戸訪問を始めました。全戸訪問は9月中にさらに1回と、計2回行っています。大変だったこと、困ったこと、びっくりしたこと、自分の思ったことを相手に伝える。それで少しでも相手の気持ちが楽になればと考えました。

——どのようなニーズがありましたか？

小川 個人の場合は、まず自宅の片付けがあって、その後は片付けの結果発生した災害ごみの整理。そのほか、水を届けてほしい、お風呂に連れて行ってほしいという要

の方などのご自宅を確認するため、見回りに向かいました。大規模な災害というところ、テレビの映像で見た阪神・淡路大震災のイメージがあり、建物の倒壊が想定されましたが、そのような家屋はなく、外観からわかる被害は見受けられませんでした。

小川 追分の支所はあまりひどい状態ではなく、意外と大丈夫だったという印象でした。ただ、後日談になりますが、建物の裏に地割れが発生していたり、床と壁の間が30センチも開いているなど、見回りでは気づかなかった大きな被害があることが判明しました。

——災害ボランティアセンター開設までの経過について教えてくださいませんか？

小川 9月8日の昼過ぎに立ち上げたところから、避難所が開設されていた頃は、町からの様々な情報を掲示板に掲示し、情報を得る仕組みをつくりました。

高橋 ニーズ調査の結果は紙でまとめているので、望もありました。さらに自宅に住めなくなった方は仮設住宅などへの引っ越しも必要になります。その手助けですね。依頼は翌年のゴールデンウィークくらいまであったと記憶しています。

また、避難所が開設されていた頃は、町からの様々な情報を掲示板に掲示し、情報を得る仕組みをつくりました。

高橋 ニーズ調査の結果は紙でまとめている



家屋内の片付けを行ったあと、家財道具をトラックで運ぶ

憶しています。発災当日から、災害ボランティアセンター立ち上げについては、関係機関を交えて考えていたんですが、安平町の被害状況がはつきりとわかりませんでした。ただ、徐々に判明してきた中で外観を

見ただけではわからない被害があり、例えば「室内散乱による片付けが必要」といった様々な声が聞こえるようになってきました。

高橋 そこで、地元で「はやきた子ども園」を運営する「学校法人リズム学園」と一緒に立ち上げるようになりました。

小川 リズム学園では、SNSを活用したボランティア募集をすでに行っていて、ある程度の人数が集まっているということでした。平時からICTの活用^たに長けていらしたんです。リズム学園にはボランティア

しました。それだけでは現況がわからないので必ず現地調査に入り、必要な人数や機材を見極めます。中に入っても危険がないか、建物の危険度は専門職でないと判断できませんから、時には建築士のボランティアさんにも同行いただきました。

——今後に備えて行っていることは？

高橋 ボランティアや運営のお手伝いをしてくださるスタッフは、様々な場所から訪れます。ですから、初めて安平町に来た方でもすぐに作業にかかることができるように、作業手順を示したマニュアルの整備を行っています。名簿と地図をセットで整理しておくことも必要です。日常の業務でも活用できますし、災害時にローラーで回る時にもそれがあれば、少ないタイムロスで動けますので。日頃から困ることがある方は災害時にはより困った状況に置かれるので、情報をきちんと整理しておくことがとても大事だと、これまで以上に感じています。

違う立場だからこそ見えるもの ボランティアセンターを支えたもう一つの力

——リズム学園ではICTを活用されているとお聞きしました。

井内 平成28(2016)年度に全国に先駆け、公私連携の認定こども園として「はやきた子ども園」の運営を始めた時から、デジタルを駆使して働き方改革に努めています。具体的には1人1台のPCとスマートフォン端末の使用、登園管理システムの導入、電子黒板の活用などです。先生同士の連絡・コミュニケーションもトランシーバとイヤホンマイクを使ったり、チャットツールを取り入れたりなど、色々な形で工夫しています。

——ボランティアセンターではどこから着手されましたか？

井内 災害ボランティアセンターを立ち上げた直後は、本部の設置より先に情報発信

に着手しました。ボランティア志願者の方

は、「状況を知りたい」「情報がほしい」だろうと。ホームページとフェイスブックページ、ツイッターを一晚で開設しました。ただこの時、電話番号だけは掲載していません。電話番号を載せると、電話対応に時間と労力が取られてしまいます。発災時は対応する時間も人手もないので。それよりも園で使っている参観日の申し込みや登降園の登録、メール連絡システムなどを災害ボラセン用にアレンジしてWEBの仕組みを使い、管理業務を徹底的に簡素化することに取り組みました。

WEBを使ったボランティア募集では、現地に來てから仕事の割り振りをするのではなく、申し込み時点で「〇〇ができる人、△人募集」という感じでニーズと定員を明示し、事前に何をしてくれるかわかるよう



安平町災害ボランティアセンター本部の様子

に努めました。心がけたのは「とにかく人を集めること」「とにかく支援作業を見つけてくること」。道外から来ていた方もすべ

でも道路に出されている災害ごみを3日間ですべて回収する「クリーンプロジェクト」では、大人のボランティアの方たちだけではなく、苫小牧の野球部や札幌のサッカー部といった高校生のほか、地元の少年団も保護者の方と一緒に「自分たちの町をきれいにするのなら、私たちも手伝います」と言って参加してくれました。どれも、多くのボランティアの方の力があって取り組めたことです。

——林さん、台さん、溝口さんはボランティアでどんな仕事をされましたか？

林 僕はまちづくりの会社を運営しています。震災の前から安平町はご縁のある町でした。ニュースで知って「とにかく何かしたい」と思い、9月15日に井内さんを頼って災害ボランティアとして来ました。2日ほど滞在して、ICTを誰でも使えるようにするための運用マニュアルを整備する仕事を行いました。

台 僕は埼玉県出身ですが、中学校の卒業式が東日本大震災の日だったんです。その時に動きたいと思いつながら動けなかったという気持ちはずっとあって、大きな災害が

学校法人リズム学園
東京都出身
井内 聖さん
埼玉県出身
林 賢司さん
山梨県出身
台 正人さん
溝口 駿さん



左から溝口さん、井内さん、林さん、台さん

あったら次は行けるようにしたいと思っていました。最初の仕事は安平公民館のトイレ掃除で、その後は資材の整理作業です。溝口 私は山梨県から来たんですが、当初道外からのボランティアを受け入れていたのが安平町だけだったので、必然的に来たという感じでした。最初の仕事は台君と同じで、安平公民館のトイレ掃除を午前中やって、午後に5名のチームで民家の片付けをしました。

——振り返ってみていかがですか？

井内 安平町と社会福祉協議会が民間である私たちの関わりを認めてくれたのが大きかったです。そして、私たちもNPOや民間の持つネットワークやフットワークの軽さを活用すると大きな力になることを実感しました。ICTの活用にも共通するのですが、「受け入れる」ことが大切だと思います。すべて自分たちでやるのではなく、立場の違う人や新しい技術、今まで使っているものの応用や助けに来てくれる人など、「受け入れる」ことが次につながるようになると思います。

——そのほかに取り組まれたことは？

井内 避難所の移転、仮校舎への引っ越し、掲示板の設置と更新、広報(号外版)の印刷と全戸配布、ニーズ調査の全戸訪問など、できることはすべてやりました。中